技能実習という選択

――ベトナム人技能実習生の来日動機の重層性とその新たな理解に向けて――

2023M30002 袁 銘沢

要旨

本研究は、北九州都市圏のベトナム人技能実習生を対象に、彼らが参加する地域コミュニティ活動への参与観察や個別のインタビューを通して、技能実習制度による来日の目的や理由の重層性を明らかにしようとする社会学分野における実証的研究である。

現在、国境を越えた人の移動はますます活発化し、日本における在留外国人人口の増加に 著しく寄与しているのが外国人労働者の増加である。外国人労働者は首都圏のみならず地 方においても急増しており、少子高齢化が進行する日本社会において不可欠な労働力とな っている。このような状況のもと、日本は既に多くの外国人労働者を受け入れており、今後 もその傾向は加速することが予想される。同時に、国際社会における人材獲得競争も激化し つつあり、日本もその中で戦略的な対応を求められている。その中でも、技能実習制度は日 本の技術を海外へ移転することを目的とした制度として長く運用されてきた。実習制度と されながらも、実態としては非熟練労働者の受け入れ制度として機能しているという制度 的な問題がこれまでたびたび批判されてきた。 さらに、 技能実習生に関わる労働環境や人権 問題が近年より多くの社会的関心を集めるようになった。その結果、2024 年の法改正によ り技能実習制度が廃止され、新たな制度として「育成就労制度」が設立されるに到る。こう した制度的な齟齬や、この制度によって来日する実習生の置かれた過酷な状況については、 制度論から現地調査にいたる多くの研究が行われてきた。しかしながら、その中でなぜ技能 実習生がこのような問題含みの制度を選択し、なぜあえてに日本を選ぼうとするのか、その 点について技能実習生自身の語りから明らかにしようとする研究はこれまで十分に行われ てこなかった。

そこで本研究は、技能実習制度を振り返り、その制度論的な問題を指摘しながらも、技能 実習生の日本を選んだというその主体的な実践に着目し、彼らがどのような事情や期待を 持って来日し、どのように日本社会と関わっているのか、出稼ぎや研修だけでは説明できな いその重層性を、移民研究における関連分野の先行研究を手がかりとして明らかにするこ とを試みた。そして、その人生設計において、技能実習生の進路は単に帰国に限定されるも のではなく、再来日や他国への移動といった選択肢も考えられる。そこでは、様々な条件が 限定されながらも、そしてグローバルなあるいは母国での経済構造や社会的逆境に起因し ながらも、同時に来日することを実現させるために技能実習制度を選択した技能実習生の 姿があった。また、その結果として彼らの日本での日常生活の一部についても研究を通して 触れることによって、日本における技能実習生そして外国人住民との共生のあり方につい て新たな視点を提供することを目指した。

本章の構成は以下の通りである。はじめに、日本における外国人労働者の現状を概観し、都市部のみならず地方においても外国人労働者の存在が無視できない規模に達していることを明らかにした。次に、ベトナム人技能実習生に関する先行研究を整理し、技能実習制度の変遷や構造的課題を概説した上で、技能実習生が制度の枠組みの中で「見えない存在」となっている現状を明らかにした。続いて、北九州都市圏でベトナム人技能実習生を対象とした参与観察とインタビューの成果を踏まえ、ベトナム人技能実習生の来日動機についての類型化をおこなったグエン(2013)の提示した類型を再検討した。そこでは、日本の若年層のワーキングホリデーによる海外渡航の動機や目的、およびそのような海外渡航を取り巻く構造的な特性について言及した先行研究の理論モデルを手がかりに、既存の類型では捉えきれなかった技能実習生の動機や目的を明らかにし、彼らの来日を単なる経済的事情だけでなく、重層的な目的を含む実践として捉え直した。そこから、彼らの技能実習生としての日本での生活について、その困難を改めて認識すると同時に、こうした技能実習生たちの来日目的の新たな理解から、日本における外国人との共生社会のあり方に関する建設的な議論に発展させるための論点を示した。

キーワード:ベトナム人技能実習生、動機、見えない存在、類型化、共生社会